

新ウェアラブルデバイス時代の幕開け

2014.7.1 発行

ポストスマホとして再度注目されつつあるウェアラブルデバイス

スマートフォンは、2013年の出荷台数が10億台の大台を超えるなど(IDC 調べ)、モバイルコンピューティングの世界で確固たる地位を確立しました。こうした中、次のスマートデバイスとして注目を集めているのがウェアラブルデバイスです。ウェアラブル(Wearable)とは、着用できる、すなわち、時計やメガネのように日常的に身に付けられるものであり、スマートフォンのような‘持ち運ぶ’から‘身に付ける’という進化が期待されているデバイスです。

新たなデバイスとして注目されていますが、こうした概念自体は30年以上前から存在していたようです。特に、長年メガネ型端末を開発してきたトロント大学のステイブ・マン教授は、ウェアラブルコンピュータの生みの親と目され、ドキュメンタリー映画にもなりました。また、ザイブナー社(1990年設立)は、世界初のウェアラブルコンピュータ会社としてHMD(ヘッドアップディスプレイ)付き端末等のウェアラブルデバイスを開発するなど注目を集めました。

そのザイブナー社は、2005年に米連邦倒産法第11章申請(自己破産)となり、ウェアラブルデバイスに対する注目度も一旦下火となりましたが、ここに来て再度注目を集めることとなります。その下地となったのはスマートフォンの普及です。高機能なスマー

トフォンが普及するにつれ、スマートフォンと連動するウェアラブルデバイスが続々と登場してきたほか、スマートフォン自体の部品や設計思想を横展開することによってウェアラブルデバイス自体の開発が比較的容易になったことが背景として挙げられます。

やはり注目すべきはiWatch

現状、ウェアラブルデバイスの中で一定の市場を確立しつつあるのが、リストバンド系でしょう。主に、フィットネス系の生体センシングが主流ですが、ウォッチ系と異なり、バッテリーが1週間ほど持つという点が受け入れられていると思われます。リストバンド系では、ナイキ社のFuelBandが有名ですが、現在は、フィビット社のFibit Forceが売れ筋のようです(Canalys 調べ)。

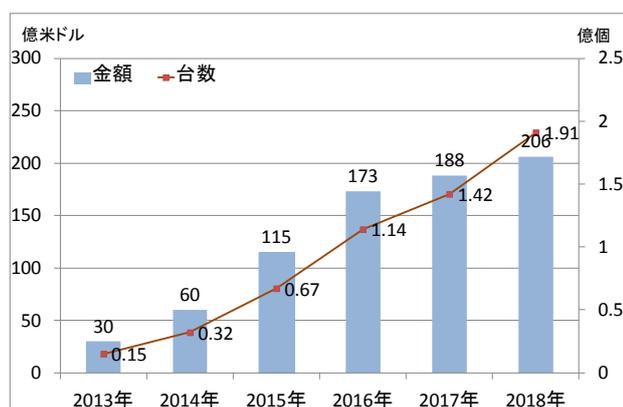
無論、ウォッチ系も今後は期待されるデバイスです。現時点での典型的なスペックは、1インチ台の液晶にセンサやBluetoothを備え、スマートフォンと連動して、メール着信やTwitterやFacebook等のソーシャルネットワーク機能を備える他、リストバンド系同様にいくつかの生体センシング機能を盛り込んだものです。ただし、バッテリーに難があり、使い方によっては1日も持たないというデメリットがあります。

しかしながら、情報面や機能面では圧倒的にリストバンド系より勝ります。加えて、単価も高いことからメ

当資料は、ホームページ閲覧者の理解と利便性向上に資するための情報提供を目的としたものであり、投資勧誘や売買推奨を目的とするものではありません。また、当サイトの内容については、当社が信頼できると判断した情報および資料等に基づいておりますが、その情報の正確性、完全性等を保証するものではありません。これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社は一切の責任を負いかねます。

メーカーにとっても魅力的であり、今後、ウェアラブル市場の主演に躍り出ることとなるでしょう。特に、年内にも発売されるのではないかと噂されるアップル社からのiOS搭載腕時計、いわゆるiWatchは世界中が注目しています。各社とも、このアップル社からのウェアラブルデバイスのスペックや評価をベンチマークとして、それを超えるようなデバイスを続々と投入してくることでしょう。そうすれば、名実ともに2014年はウェアラブルデバイス元年となり、翌年からは本格的な市場の立ち上がりが期待できるでしょう。

(図表) ウェアラブルデバイスの市場規模予測



出所: 台湾 ITRI IEK より明治安田アセットマネジメント作成

HMD 搭載メガネ型デバイスは、まずは B2B からか・・・

他方、HMD 搭載のメガネ型デバイスも 10 年前と比べるとかなり軽量化が進んできましたが、この分野での注目は Google Glass となるでしょう。今年 5 月から一般販売が開始されましたが(ただし、米国居住者のみ)、盗撮などプライバシー問題等の議論を巻き起こしつつも、話題性は十分です。

日本メーカーでも、先頃セイコーエプソンが前作からのモデルチェンジ版である新型 MOVERIO を発

表、こちらは Google Glass のような単眼タイプではなく、両眼タイプとなっています。また、HMD 非搭載型となりますが、メガネチェーンを展開する JINS は、センシング機能を備えた JINS MEME(ミーム)を 2015 年に発売すると発表しています。

ただし、メガネ型デバイスは、プライバシーも含めて乗り越えるべき壁が少なくありません。それゆえ、まずは TPO(時間、場所、場合)が限定される形での使用が現実的であり、店舗での接待、工場の組み立て作業、搬送業務、手術等の特定の B2B 市場での立ち上がりのほうが先行するのではないのでしょうか。

ウェアラブルデバイスの普及により半導体、電子部品の市場は底上げの可能性

前述したように、過去にもウェアラブルブーム的なフェーズは存在しましたが、過去と決定的に異なるのは、大幅なテクノロジーの進化です。特に、半導体や電子部品の高性能化や小型化、あるいは低消費電力化といったウェアラブルには欠かせない要素は飛躍的に向上しており、今後はさらに性能が加速していくことでしょう。

実際、インテル社ではウェアラブルデバイス向けに新プロセッサ Quark を発表、テキサスインスツル社やクアルコム社でも専用のチップを開発しています。また同時に、ファブダリー最大手の TSMC 社も、ウェアラブルデバイス向けにラインを拡充し、商機をうかがっているようです。それゆえ、まずは、半導体製造装置、特にボリュームに連動する後工程装置メーカーが恩恵を受けやすいといった構図が想定されるのではないのでしょうか。

国内株式運用部調査担当 シニア・リサーチ・アナリスト
(テクノロジーハード/ソフト担当)
久保井 昌伸

当資料は、ホームページ閲覧者の理解と利便性向上に資するための情報提供を目的としたものであり、投資勧誘や売買推奨を目的とするものではありません。また、当サイトの内容については、当社が信頼できると判断した情報および資料等に基づいておりますが、その情報の正確性、完全性等を保証するものではありません。これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社は一切の責任を負いかねます。